

## 文学部英語文化学科の取り組み

新 谷 好 (文学部英語文化学科)

### 1996年度から2002年度までの活動の総括とその成果について

1998年度、イギリス・アメリカ語学文学科から英語文化学科への名称変更によって、英語文化学科の教育方針を従来の異文化理解から「英語文化」の多様性の理解に移すと同時に、体験的英語学習を促進するために2001年度から「カナダ現地演習」と「カナダ文化演習」を新設し、翌年度には古谷充氏を正式に客員教授として迎えて「アメリカ文化講義」の一環としてジャズについての講演とジャズの演奏を行っている。そして、2003年度のカリキュラム改正で、英語文化学科は英語運用能力のさらなる向上のために、「検定・資格英語」、「ライティング」、「プレゼンテーション」などの実践的学科科目を追加した。

このような学科の名称変更やその教育目標の移行は、これまでの「特色ある教育研究の推進」のテーマに如実に現れているが、我々はその教育目標を達成する一助として、1996年度から「英語クラブによる異文化接触」、翌97年度から99年度までは「体験を通じた異文化理解」、2000年度には「『英語文化』へのアプローチ」、2001年度には「英語文化の『多様性』の体験」、2002年度からは「『英語文化』再発見」をテーマとして掲げて、主に異文化理解に加えて「英語文化」の多様性の理解を目指して実践的かつ体験的教育の強化に取り組んできた。

それらの重要なテーマを遂行するため、英語文化学科が行なってきた実践的かつ体験的教育のプログラムをほぼ年代順にまとめると、次の(1)-(6)になる。

- (1) English Parlor
- (2) Excursion
- (3) Lecture
- (4) ジャズについての講演と演奏
- (5) コメディなどの演芸会
- (6) TOEIC® 模擬テスト

まず、(1)では、昼食時や放課後を利用して学生は非常勤講師であるネイティブ・スピーカーとの食事や喫茶などを通じて、日常的なコミュニケーションを行なうと共に社交術や講師の説明する異文化などについて体験的学習を行なった。(2)では、学外活動として主にシェイクスピア

#### 文学部英語文化学科の取り組み

劇を観劇し、教室では体験できない劇の臨場感を味わいながら舞台の構造や演劇の演出法にも直接触れ、また、異文化理解の一貫として交通博物館や神戸異人館やアメリカン・フットボールの試合を見て、交通手段、輸入技術と文化、アメリカン・フットボールのルールとその文化の理解を深めた。(3)では、様々な分野の講師(英語落語家のアメリカ人を招いたこともある)を招聘して諸種の文化についての講演会を積極的に行ない、主に学生の英語聴解能力の向上を図ると共に、様々な講師の観点や視点に直接触れることによって「異文化」に対する感受性や理解を促進させることを意図した。(4)では、ジャズの生演奏とジャズの歴史についての講演を通じてアメリカ文化の原動力のジャズを体感し、「アメリカの文化と文学」の科目を補完してアメリカ文化理解を深化させようとした。(5)では、主に日本語と英語で行なわれるバイリンガルのコメディを観劇して異文化で育った人々のユーモア感を体験すると同時に、外国人が日本的なものをどのようにコメディの中に取り入れているかを体験学習するものであった。(6)では、実践的な英語運用能力の指標としてTOEIC®のミニ模擬テストを行なって、学生各自のコミュニケーション能力の向上とその動機付けを図ろうとした。

このような活動の成果としては、(1)の場合には、学生が英語によるスピーチ能力を伸ばし、英語文化学会主催の「スピーチ・コンテスト」(追手門学院の高校2校を招待して行い、またスピーカーとなってくれる高校生も着実に増加した)に参加し、入賞者のスピーチを英語文化学会発行の『カライドスコープ』(学生号)に掲載し、また学生の書き上げた英文エッセイのコンテストを行って、その入賞者の英文を同誌に掲載している。また、(6)に関しても、2004年度からTOEIC®のミニテストを実施して、一部能力別クラス編成の参考とし、学生が「スピーチ・コンテスト」や「インターナショナル・イブニング」(交換留学生を交えての交歓パーティ)に参加し、その英語運用能力の成果を発表してくれることが毎年期待されている。また、このテストの実施により刺激を受けたより多くの学生が、我々の学科科目である「カナダ現地演習」に参加し、帰国後には自発的に英語文化学会のプログラムに参加し、その体験記を英文の報告書である『Dream Catcher』に発表している。最後に、特筆すべきは、(4)のジャズについての講演とライブ演奏である。英語文化学科は、サクソ奏者の古谷充氏を学科の客員教授に迎え、ジャズの生演奏と講演を行ってきた。そして、これには市民が数多く参加し、好評で新聞などでも大きく取り上げられている。また、この講演と演奏の参加者の感想なども英語文化学会発行の『ニューズレター』に掲載している。

#### 2003年度の活動の総括とその成果について

2003年度も、我々は「『英語文化』再発見」をテーマとして掲げ、特色ある教育プログラムを実施したが、これは学生に授業とは異なった観点から「英語文化」に触れさせて、学生の視野を広げると共に自発的な学習を促進させ実社会で要求される英語運用能力を身に付けさせようとい

う意図があった。そのため、我々は、教室内での授業運営とは全く異なる観点から、英語学習の動機付けを速やかに行なうために次のプログラムを企画した。

- (1) 英語圏レクチャーシリーズ
- (2) コメディアンによる演芸会
- (3) ジャズの講演と演奏
- (4) TOEIC®の模擬テスト

上記の(1)については、11月25日に陶芸家のジョン・ディックス氏を講演者として招き、20年間以上にわたる彼の体験を交えて自作の陶芸作品をスライドで写しながら、陶器作りの魅力について解説していただき、作品の鑑賞を行なった。アメリカ人のジョン氏に日本文化の特徴と焼き物の面白さを教えられて、学生たちは非常に驚いたようである。(2)については、ブラック・チーズ(マーカスとティムのコンビ)によるバイリンガル・コメディを5月22日に行い、日本在住の外国人から見た日本文化と英語文化の価値観の差異を、主に新入生は感得することができたと思う。というのは、この演芸会は、英語文化学会と共催で行い、新入生歓迎会として開催されたからである。(3)については、10月6日に客員教授の古谷充氏にジャズの歴史についての講演「繁栄と受難の昭和ジャズ史」を行なっていただき、また彼を中心としたミュージシャンによる解説付きのライブ演奏を同月9日に行なっていただいた。この講演と演奏により、アメリカ社会の白人と黒人のミュージシャンの交流や日本の昭和のジャズ史などを、学生は直接に体感し、ジャズの演奏法や歌詞の内容の推移なども実地体験したようである。そして、(4)に関しては、1年次学生の場合は入学直後の4月5日にTOEIC®のミニテストを行い、一部能力別クラス編成の参考資料とし、2年次学生の場合には10月16日に行なって、英語習得の目標設定の機会を与えて学習意欲を促進する一助とした。

### 今後の活動方針について

上述の通り、我々の学科は1998年に旧名称のイギリス・アメリカ語学文科学科より英語文化学科に名称変更し、学科の教育方針の重点も異文化理解から「英語文化」の多様性の理解に移し、現地体験型の「カナダ文化演習」、「カナダ現地演習」を2001年度より学科科目に加え、2003年度のカリキュラム改正で英語運用能力のさらなる養成のために「検定・資格英語」、「コミュニケーション」、「ライティング」、「プレゼンテーション」などの実践的科目を追加した。また、アメリカ文化講義の一環として、アメリカ文化の体験版であるジャズの歴史についての講演と演奏を行なっていただくために、2002年度から古谷充氏を客員教授として迎えた。

このような観点から、我々は今後も異文化理解と英語文化の多様性の理解を旗印にして、現地

演習の充実や教育現場での体験型学習を導入し、TOEIC®テストの実施などによって英語運用能力の向上を図って英語教員の養成を目指し、同時に英語文化学会との共催などで様々な文化活動を展開していきたい。そのため、我々の学科では、従来の特徴ある教育活動とその成果を踏まえて、次のような5つのテーマを念頭に置きたいと思っている。

#### 1 現地体験型学習（「カナダ現地演習」）の充実

学科のカリキュラムの「カナダ文化演習」と「カナダ現地演習」を充実させ、カナダでの学習の事前・事後の指導を行なうと共に、イギリス、アメリカ、オーストラリアからの交換留学生との交流を図る場としていきたい。このようは交換留学生との交流は、2003年度より「カナダ文化演習」の授業の中で行なわれた。

#### 2 English Parlor

学科科目の「コミュニケーション」、「プレゼンテーション」の授業を補完し、ネイティブ・スピーカーとの会話や社交を通して、学生が積極的に会話やディスカッションに参加するよう指導し、英語運用能力の体験発表の場としたい。

#### 3 実践的英語学習のためのテストの実施

学科科目の「検定・資格英語」の授業の成果として、学生は積極的にTOEIC®テストを受験し、英語の運用能力を向上させて、その成果をスピーチ・コンテストなどで披露できるように今後も指導していきたい。

#### 4 ジャズ演奏と講演会など

学科教員と学生の組織する「英語文化学会」と協賛して、ジャズのライブ演奏や講演会、英語コメディなどを開催して、異文化理解と「英語文化」の多様性を学生に十二分に体験してもらいたい。

#### 5 英語教育現場での実習

英語の知識や運用能力を実践するために、学生が教育の現場に赴いて、生徒指導や英語教育のあり方を体験させたい。また、追手門学院の中高2校と茨木市立北中学校の教育現場での学生の実習を自主活動科目に位置付けて単位化の方向を目指したい。

以上のように、我々の学科の意図するテーマは、学科のカリキュラムや「英語文化学会」の活動と連動している。また、我々は今後も学院の中高との連携を図り、茨木市にも開かれた文化活動を行なって、異文化理解を促すとともに「英語文化」の多様性を体験学習できるよう配慮していきたいと思っている。